

丹羽 洋岳（にわ・ようがく）

1、プロフィール

歌人。和田山蘭、加藤東籬等とともに本県歌壇の草分け的存在である。11歳の時、発病。初めて歌作した14歳から、没する84歳の長きに渡って数多くの短歌を作り続けた。

<生没>

1889(明治22)年3月9日 ~ 1973(昭和48)年5月4日

<代表作>

歌集『山上静観』『氷紋』『山霊』

詩文集『峡谷断章』

遺歌集『青荷峡』

<青森との関わり>

南津軽郡山形村(現在黒石市)板留に生まれる。発病後、黒森山浄仙寺にて勉学。青荷温泉開発に半生をかける。

2、作家解説

丹羽洋岳(本名、繁太郎)は、和田山蘭、加藤東籬らとともに本県歌壇の草分け的存在である。

生家は板留温泉地区でも古い家柄で、客舎が一番大きかった。上の兄は3歳で夭折していたので本人の誕生は一家の喜びであった。少年期の洋岳は成績優秀で、学科では理科が得意であった。

しかし、この利発な少年を突然病魔が襲った。発熱とともに全身が激痛に苛まれ、神経性疾患と診断される。当時として適切な処置のないまま、身体不自由な結果となった。明治33年、11歳の時である。

洋岳少年は、この避けがたい悲痛な現実には耐え、受容し、さらに奈落の底で一条の光をさがし求めるように文学書を読む。創作することで苦悩を浄化し、透徹し

た自己と向かい合う道を見いだしていった。14 歳の時、初めて歌を作り、「東奥日報」の新年募集歌に応募した。以来、明治 41 年ころには「明星」「心の花」「スバル」「文章世界」「新潮」などに投稿している。歌号も本名の他に「田代草一」「駒一」「丹羽草一」を用いることもあった。この間、向学心に燃える洋岳は、黒森山浄仙寺寺子屋に(明治 38 年 16 歳)入り、寂導らの教えを受ける。

洋岳が孤独の中にあって歌への意欲を燃やしていた頃、同じ情熱に燃える和田山蘭、加藤東籬は、本県最初の短歌グループ蘭菊会を結成。同回覧誌創刊号から終刊まで洋岳は数多く発表する。後に創刊される「東北」「はまなす」にも意欲的に発表し続ける。大正 5 年、若山牧水が来県し、板留の洋岳宅に半月余滞在している。この時、洋岳は牧水流朗詠を伝授されている。12 年、処女歌集『山上静観』を発刊。洋岳の作歌精神は衰えることなく、40 代初期、青荷に移り住んで、さらに透徹した歌心、静謐な歌境となって冴え、晩年まで歌を作り続けた。昭和 34 年第 1 回県文化賞受賞。

3、資料紹介

○『丹羽洋岳全歌集 山霊』

図書

1966(昭和 41)年 9 月 30 日

185mm × 135mm

六十数年に渡る歌 866 首を収録。歌は、ほぼ年代順に配列され、丹羽洋岳略年譜を附す。歌集名は、和田山蘭が洋岳を詠んだ漢詩中の詩句より採る。